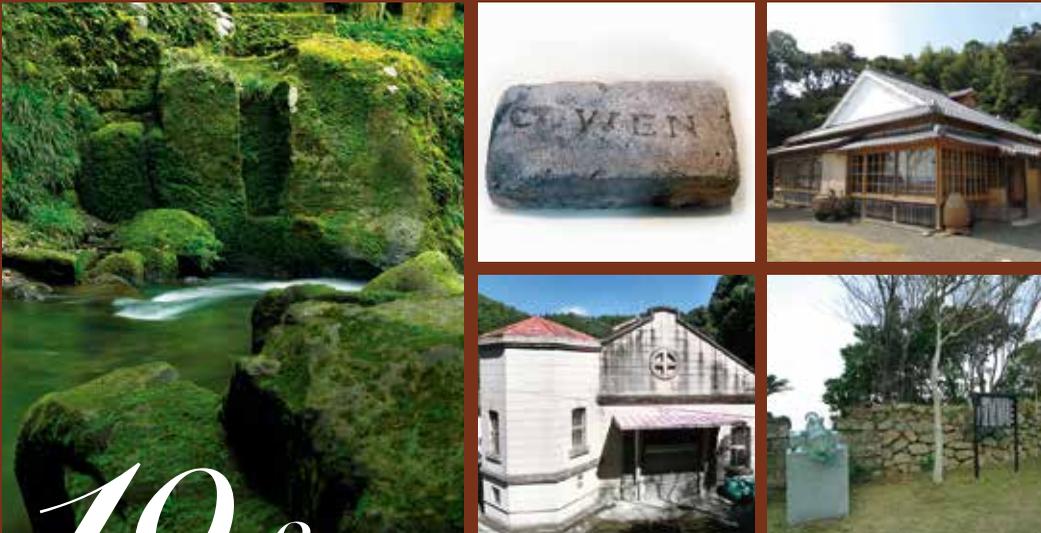


かごしま産業遺産の道

ここには日本近代化の原点がある



19 Stories
95 Heritages

【集成館事業にまつわる県内95の産業遺産】ガイドブック

かごしま産業遺産の道

ここには日本近代化の原点がある

県では、世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」や関連産業遺産等をPRする動画を制作しています。ぜひ、ご覧ください。



「かごしま産業遺産をたくさんぼ」
動画配信中！

こちらからご覧ください



「かごしま産業遺産の道」の6つのモデルコースを紹介！



「かごしまタイムトラベル」
動画配信中！

こちらからご覧ください



集成館事業を中心に鹿児島が日本の近代化に果たした役割等を分かりやすく解説！



「日本近代化発祥の地・鹿児島」
動画配信中！

こちらからご覧ください



「明治日本の産業革命遺産」の県内構成資産等を紹介！

〈本編〉

〈短編〉

世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」
全国8県11市の構成資産を舞台とした
短編ミステリー小説を順次、
公開中

メディアプラットフォーム **note** にて **7作品** 公開中
(令和6年3月現在)



【集成館事業にまつわる県内95の産業遺産】ガイドブック

【発行・企画】

鹿児島県観光・文化スポーツ部世界文化遺産室

〒890-8577 鹿児島市鴨池新町10番1号 TEL.099-286-2364 FAX.099-286-5590

【制作】株式会社トライ社 【印刷】2024年3月





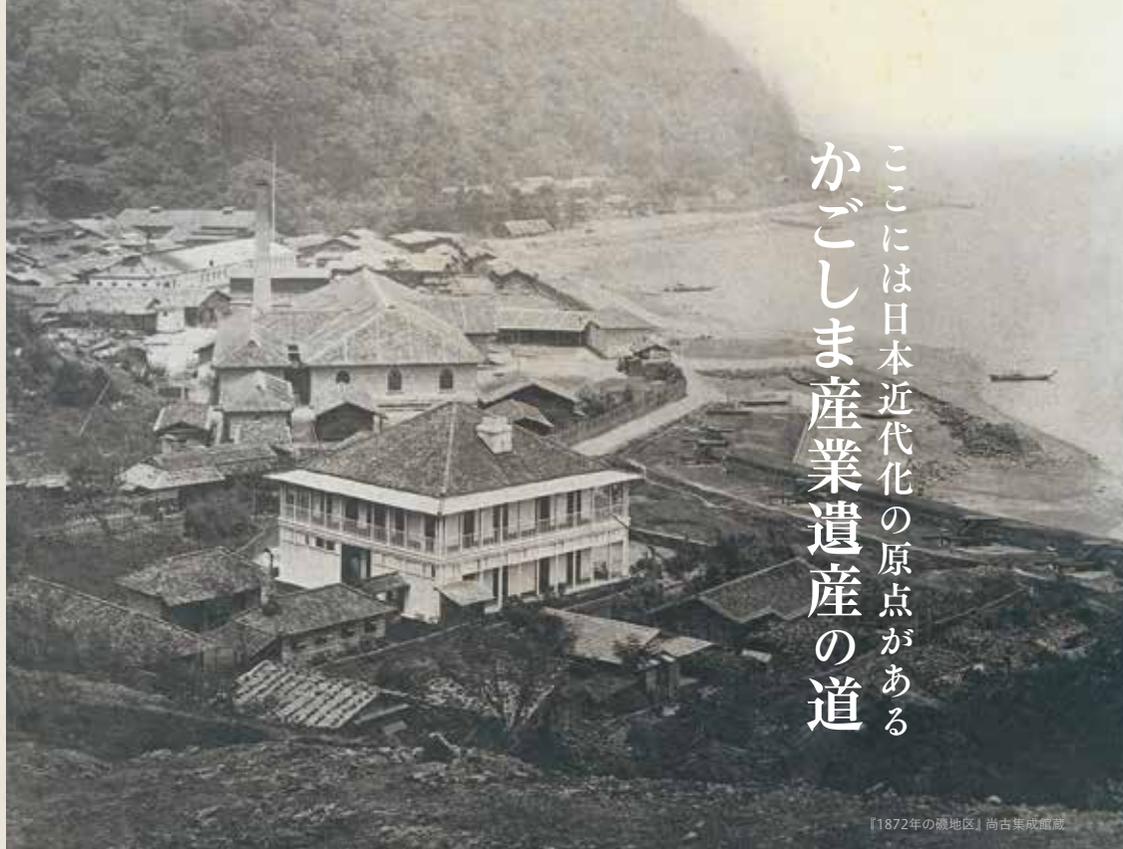
『薩州鹿兒島見取絵図』武雄鍋島家資料 武雄市蔵

日本の産業化の先駆け 「集成館事業」

1851年に薩摩藩主になった島津斉彬は、日本を強く豊かな国にするためには、軍備の強化だけでなく、人々の暮らしを豊かにする必要があります。と考え、鹿児島市磯の地に「集成館」と名づけた日本初の工場群を築きました。

ここでは、鉄製の大炮を造るため、西洋の書物と在来技術により、自力での反射炉建設に成功しました。

集成館事業は、製鉄や造船、紡績、ガス灯、印刷、輸出入の薩摩焼、薩摩切子の開発など多方面に及び、最盛期には1200人も人が働いていました。



【1872年の薩摩地区】尚古集成館蔵

ここには日本近代化の原点がある かごしま産業遺産の道

平成27年7月、幕末から明治期までの、日本の産業化を示す8県11市にある23の資産が「明治日本の産業革命遺産」として世界文化遺産に登録されました。

本県には、「旧集成館」、「寺山炭窯跡」及び「関吉の疎水溝」の3つの構成資産があります。これらは、いずれも薩摩藩主島津斉彬が着手した集成館事業に関連しますが、この集成館事業にまつわる産業遺産は、県内にも多数広がっています。

県では、こうした県内に広がる産業遺産95点について、富国強兵や殖産興業の観点から、薩摩藩の近代化を物語る19のストーリーに編集した上で、「かごしま産業遺産の道」と題して、県観光サイト上で紹介しています。

そして、このたび、「かごしま産業遺産の道」に掲載している95の産業資産を一覧でき、手軽に利用できるガイドブックを作成しました。

これらの産業遺産は、薩摩の近代化に尽くした先人たちの歩みを伝え、現在に生きる私たちが地域の歴史・生活・文化などを学ぶことのできる貴重な「財産」です。

このガイドブックが、集成館事業などを背景とする世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」や、地域の身近なところにある多様な産業遺産について、興味や関心をもっていただくきっかけになれば幸いです。

幕末の名君と謳われた、 開明君主・島津斉彬

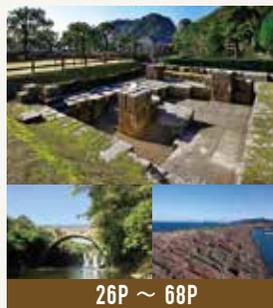
第11代薩摩藩主（1809年～1858年）

日本全体を見据え、「富国強兵」、「殖産興業」による強く豊かな国づくりを目指し、「集成館事業」を始めました。事業が困難を極める中、斉彬が藩士を鼓舞した言葉「西欧人も人なり、薩摩人も人なり」が残されています。藩主としての期間は、わずか7年でしたが、その志は多くの人々によって受け継がれました。明治維新で活躍した西郷隆盛ら有能な藩士を見出した人物でもあります。



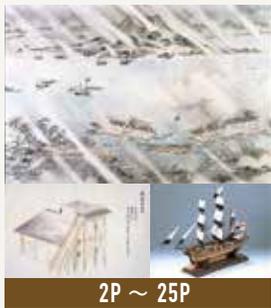
尚古集成館蔵

INDEX



26P ~ 68P

県内に広がる 95の産業遺産



2P ~ 25P

薩摩の近代化を物語る 19のストーリー

※ このガイドブックは、令和6年3月時点の情報に基づき作成しておりますので、予めご承知おきください。
※ 県観光サイト「かごしま産業遺産の道」では、当ガイドブックに未掲載の情報(各産業遺産の「建設年代」、「地表遺構の有無」等)もご覧いただけます。また、産業遺産によっては、「見学する際の留意事項」等が詳しく掲載されておりますので、事前にご確認ください。

19のストーリー

19 Stories
95 Heritages

- 1 ヨーロッパの高炉と薩摩の製鉄炉
- 2 独自に鉄製の大型大砲を完成させた薩摩藩
- 3 薩摩藩初の砲台・青銅砲の製造へ
- 4 書物で学び、和船の技術で洋式艦船を
- 5 日本最大・薩摩の火薬工場建設へ
- 6 薩摩藩の防衛力を高める城下の砲台
- 7 鉄製大砲を製造。薩摩の水と火の力
- 8 ヨーロッパ式の強力な軍隊をつくる
- 9 きっかけは薩英戦争。近代化への道



■ 第一期集成館事業 当時の集成館の様子(想像図)参考『薩州鹿児島見取絵図』

- 10 紡績から産業を興す
- 11 近代化に貢献!「白いダイヤモンド」
- 12 鉱山は薩摩藩の重要な資金源
- 13 伝統的な薩摩焼が近代化や外交に貢献
- 14 集成館で今もつくられる「薩摩切子」
- 15 薩摩藩・最先端のインフラ実験に成功
- 16 農業が人々の暮らしを豊かに導く
- 17 西洋技術の研究と人材育成
- 18 琉球王国を介した外交で財政を強化
- 19 英国留学生派遣と機械紡績

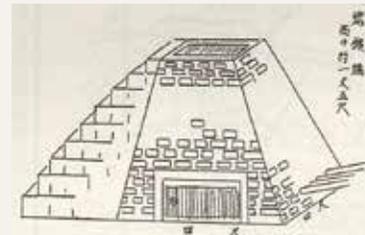


■ 第二期集成館事業 当時の磯地区の様子(想像図)参考『集成館古写真』

ヨーロッパの高炉と薩摩の製鉄炉



1854年、薩摩藩主・島津斉彬は鉄を作る洋式高炉の建設に成功しました。薩摩の在来型製鉄炉は、ヨーロッパと同じく炉が高いことや水車を使う点が共通しているため、薩摩の製鉄技術が応用できたとされています。鹿児島県南九州市知覧町にある厚地松山製鉄遺跡からは、薩摩藩が幕末以前に高炉状の石組み炉と水車動力による製鉄を行っていたことがわかります。志布志や穎娃の砂鉄、真幸（現宮崎県えびの市）の鉄鉱石が集成館での高炉製鉄に使用されました。



『藩政時代における製鉄鉱業』島袋盛範

独自に鉄製の 大砲を完成させた薩摩藩



『薩州鹿児島見取図』武雄鶴島家資料 武雄市蔵

日本列島の最南端にある薩摩藩は、他の藩よりもいち早く欧米列強の脅威を感じていました。薩摩藩は欧米列強に対抗するため、鉄製の大型製造をはじめとする軍備の強化を進めます。そして、自分達の技術や原料をいかしつつ、ヨーロッパの科学技術と融合し、気の遠くなるような回数、試行錯誤を繰り返して、鉄製の大型製造を完成させました。幕末に鉄製の大型製造に必要な鉄をつくる高炉や、鉄を溶かして砲身をつくる反射炉、砲身に穴を開ける鑽開台の3つともそろえて建設したのは、薩摩藩だけでした。

71 鍋倉製鉄所跡
59P

72 森山家住宅土蔵・主屋・旧作業場
59P

79 志布志砂鉄採取地
62P

28 関吉の疎水溝
40P

29 寺山炭窯跡
41P

30 落とし
41P

60 南京皿山窯跡
55P

64 穎娃砂鉄採取地
56P

12 製煉所（開物館）跡
33P

17 火の河原跡
35P

25 反射炉跡
39P

26 高炉跡
39P

27 礮窯跡
40P

19 Stories
95 Heritages
ストーリーに関する産業遺産はWEBでもご確認いただけます

79 志布志砂鉄採取地
62P

19 Stories
95 Heritages
ストーリーに関する産業遺産はWEBでもご確認いただけます

65 厚地松山製鉄遺跡
56P

66 厚地松山製鉄遺跡出土品
57P

71 鍋倉製鉄所跡
59P

17 火の河原跡
35P

26 高炉跡
39P

64 穎娃砂鉄採取地
56P



薩摩藩初の砲台・ 青銅砲の製造へ

第10代薩摩藩主の島津斉興は1824年の宝島事件、1837年のモリソン号事件など欧米列強の脅威に危機感を抱きました。そこで、外国船の来航に備えてヨーロッパ式の砲術を学ぶ砲術館と、青銅砲などの生産を行う鑄製方を設置。これが薩摩藩での大砲製造の始まりで、これらの青銅砲は指宿や山川、根占、鹿兒島など、港や海岸部を中心に各地に配備されます。青銅砲はコストがかかるため、島津斉彬が指揮を執った集成館事業では鉄製砲の生産が試みられましたが、鑄製方で培われた技術や経験はその取り組みに活かされました。



『薩州鹿兒島見取絵図』武雄鍋島家資料 武雄市蔵



鹿兒島湾の防衛のために設置された根占原台場跡

胸壁は長さ約50m、高さ約2mあり、海岸の花崗岩を積んでつくられていて、弾丸が発射される砲門部分が2か所残っています。

19 Stories
93 Heritages

ストーリーに関する産業遺産はWEBでもご確認いただけます



74 久志砲台跡

60P



69 松ヶ浦砲台跡

58P



68 颯娃別府砲台跡

57P



67 知覧塩屋砲台跡

57P



39 大門口砲台跡

45P



19 砲術館跡

36P



18 鑄製方跡

36P

関連産業遺産

00P 関連産業遺産紹介ページ



91 内之浦砲台跡

67P



90 伊座敷砲台跡

67P



89 瀬脇砲台跡

66P



88 根占原台場跡

66P



53 五人番所跡(砲台跡)

52P



42 烏島砲台跡

47P



41 横山(袴腰)砲台跡

46P



40 天保山砲台跡

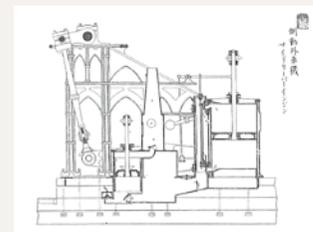
46P

書物で学び、和船の
技術で洋式艦船を



『昇平丸模型』尚古集成館蔵

島津斉彬は大砲生産と併せて、欧米列強に対抗できる蒸気船の建造にも力を注ぎました。藩内に磯造船所など4か所の造船所を建設。1854年には本格的な洋式帆船「昇平丸」、翌1855年には国内初の蒸気船「雲行丸」を建造します。これらの洋式船は、船大工がヨーロッパの書物から得た知識をもとに和船の技術だけで建造したといわれています。ただし、洋式船の建造は容易ではなく、薩英戦争後は外国船購入へと方針を転換し、集成館には蒸気船の部品を修理する機械工場が建設されました。



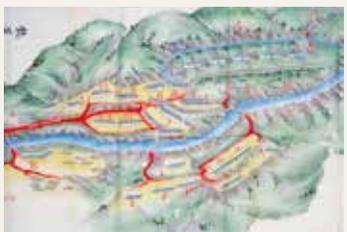
雲行丸機軸図『薩藩海軍史』尚古集成館蔵

日本最大・薩摩の
火薬工場建設へ



『敷根火薬製造所絵図』鹿児島市維新ふるさと館蔵

薩摩藩は軍備の近代化のため、火薬の量産に取り組みます。藩内の各地に火薬の原料となる硝石工場や火薬製造所を建設しました。これらの施設は廃藩置県後に明治政府へと継承されます。そして、火薬から生産された弾薬は陸軍火薬庫に保管されました。1877年に起こった西南戦争は、この陸軍火薬庫の襲撃が発端となったとされています。西南戦争後、薩摩藩で培われた火薬の製造技術は薩摩藩の技術者たちによって、東京に設置された目黒火薬製造所へと受け継がれました。



『薩州鹿児島見取絵図』武雄鍋島家資料 武雄市蔵



49 山川火薬製造所跡
50P



54 敷根火薬製造所跡
52P



53 敷根火薬製造所の石臼
52P



5 滝之上火薬製造所跡
30P



6 谷山作硝局跡
30P



7 陸軍火薬庫跡
31P



31 牛根造船所跡
63P



72 吉利御仮屋跡
55P



78 久見崎軍港跡
62P



80 集成館製蒸気機関
62P



22 向江船手跡
37P



23 旧集成館機械工場
38P



24 磯造船所跡
38P

19 Stories
95 Heritages

ストーリーに関する産業遺産はWEBでもご確認いただけます

19 Stories
95 Heritages

ストーリーに関する産業遺産はWEBでもご確認いただけます



新波止砲台跡

鹿児島城の正面を守る主力砲台で、薩英戦争時には、150ポンド砲をはじめ11門の大砲が備えられていました。



38 新波止砲台跡

45P



37 祇園之洲台場跡

44P



18 鑄製方跡

36P

**関連
産業遺産**

00P 関連産業遺産
紹介ページ



42 烏島砲台跡

47P



41 横山(袴腰)砲台跡

46P



40 天保山砲台跡

46P



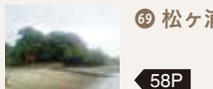
39 大門口砲台跡

45P



89 瀬脇砲台跡

66P



69 松ヶ浦砲台跡

58P



90 伊座敷砲台跡

67P



74 久志砲台跡

60P



91 内之浦砲台跡

67P



75 枕崎砲台跡

60P



92 松崎砲台跡

67P



88 根占原台場跡

66P



43 沖小島砲台跡

47P



53 五人番所跡
(砲台跡)

52P



67 知覧塩屋砲台跡

57P



88 姪ヶ別府砲台跡

57P



『旧薩摩御城下絵図面』鹿児島県立図書館蔵



『薩英戦争絵巻』尚古集成館蔵

アヘン戦争で清が敗れた後、イギリスとフランスの艦船が通商を求めて琉球に来航する事件が起きました。これに危機感を抱いた島津斉興は、外国船の侵入に備えて藩内各所の沿岸に砲台を建設。島津斉彬は砲台を増設・改修し、防衛力を高めました。1863年の薩英戦争では斉彬が整備した城下の主力砲台を使ってイギリス軍と戦いました。

19 Stories
95 Heritages

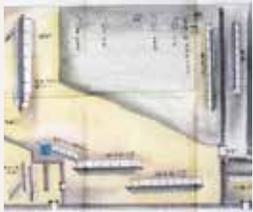
ストーリーに関する
産業遺産はWEBでも
ご確認いただけます





ヨーロッパ式の
強力な軍隊をつくる

『練兵図』尚古集成館寄託



『薩州鹿児島見取絵図』
武雄編島家資料 武雄市蔵

1837年に日本人の漂流民を送り届けるために山川港に入港しようとしたアメリカ商船モリソン号を、薩摩藩の砲台が攻撃して退去させる「モリソン号事件」が起きました。これに危機感を抱いたのが島津斉興。欧米列強からの脅威に危機感をもったことにより、斉興は青銅砲やヨーロッパ式の銃を造る鑄製方、ヨーロッパ式の砲術を広める砲術館を建設し、軍隊の近代化に取り組みました。そして、斉興の跡を継いだ斉彬はすべての兵士に射撃訓練を受けさせるほか、自ら陣頭指揮を執って軍事演習を繰り返してヨーロッパ式の軍隊の整備を進めました。

19 Stories
95 Heritages
ストーリーに関する
産業遺産はWEBでも
ご確認いただけます



20 斉彬陣屋跡
37P



21 射場山跡
37P



18 鑄製方跡
36P



19 砲術館跡
36P



鉄製大砲を製造。
薩摩の水と火の力

集成館事業は、ヨーロッパの技術とわが国の伝統技術とを融合し、産業の近代化を進めたことが大きな特徴です。薩摩藩では石炭を産出しなかったことから、かわりに燃料として木炭を、当時は無かった蒸気機関のかわりに動力として水車を活用しました。石炭のかわりに藩内で豊富に生産されていた木炭に目をつけたのは島津斉彬で、火力の強い白炭を生産すべく技術者を紀州に派遣しました。集成館事業が行われた場所と、そこに燃料・原料及び動力を供給した2つの施設が現在、世界文化遺産の構成資産として登録されています。



関吉の疎水溝から延びる水路



33 永吉水車館跡
42P



29 寺山炭窯跡
41P



30 落とし
41P



32 田上水車館跡
42P



25 反射炉跡
39P



26 高炉跡
39P



28 関吉の疎水溝
40P

19 Stories
95 Heritages
ストーリーに関する
産業遺産はWEBでも
ご確認いただけます





薩摩側の砲弾とイギリス艦隊の砲弾
尚古集成館蔵

祇園之洲台場跡と 使われた砲弾

薩摩側の砲弾は導火線で爆発させる球形弾でした。イギリス側は物に当たって爆発する尖塔弾でした。

祇園之洲砲台は、1853年に島津斉彬が築きました。薩英戦争時には最大の激戦地となり、大砲はことごとく破壊されたと言われています。



23 旧集成館機械工場

38P



16 薩英戦争記念碑

35P



15 薩英戦争本陣跡
(千眼寺跡)

35P

関連 産業遺産

00P 関連産業遺産
紹介ページ



39 大門口砲台跡

45P



38 新波止砲台跡

45P



37 祇園之洲台場跡

44P



34 鹿児島紡績所跡

43P



77 留学生
渡欧の地

61P



49 山川火薬
製造所跡

50P



40 天保山砲台跡

46P



88 根占原台場跡

66P



53 五人番所跡
(砲台跡)

52P



41 横山(袴腰)
砲台跡

46P



89 瀬脇砲台跡

66P



54 敷根火薬
製造所跡

52P



42 烏島砲台跡

47P



92 松崎砲台跡

67P



55 敷根火薬
製造所の石臼

52P



43 沖小島砲台跡

47P



近代化への道 きっかけは薩英戦争。

『薩英戦争絵巻』尚古集成館蔵



祇園之洲砲台『薩英戦争絵巻』尚古集成館蔵

1863年、生麦事件の賠償金交渉のため、7隻のイギリス艦隊が鹿児島湾へ来航しました。あらかじめ情報をキャッチしていた薩摩藩は砲台を強化し、砲撃訓練を繰り返してイギリス艦隊の来航に備えました。イギリス側が薩摩藩の蒸気船を捕獲したことをきっかけに薩英戦争が始まり、激しい砲撃戦によって城下の砲台はすべて破壊されました。一方でイギリス艦隊も薩摩藩の砲撃によりすべての軍艦が損傷しました。この戦争で薩摩藩は、欧米列強との圧倒的な力の差を知ります。そして、薩英戦争をきっかけにイギリスから積極的な技術導入を進めるようになりました。

19 Stories
95 Heritages

ストーリーに関する
産業遺産はWEBでも
ご確認ください





近代化に貢献！
「白いダイヤモンド」

須古白糖製造工場跡 耐火煉瓦

江戸時代、奄美大島で生産される黒糖は薩摩藩の特産品であり、最も重要な財源でした。島津斉彬は開国によって白砂糖の商品価値が高くなると考え、オランダの技術書を参考に白砂糖の製造を研究。斉彬の死後、五代友厚の提案によって奄美にヨーロッパの技術による白砂糖工場4か所が建設されました。工場の建設には、後に東京の銀座煉瓦街を設計するイギリス人技師ウォートルスも携わりました。原料・製品の輸送、薪の調達などが島民の大きな負担となり、2〜3年で廃止されましたが、奄美の人々がつくった黒糖や白砂糖は、借金を抱えた藩財政の立て直しに大きく貢献し、集積館事業や明治維新の資金源として日本の近代化を支えました。



93 瀬留白糖製造工場跡

68P



94 久慈白糖製造工場跡

68P



95 須古白糖製造工場跡

68P



75 坊津白糖製造工場跡

60P



82 金久白糖製造工場跡

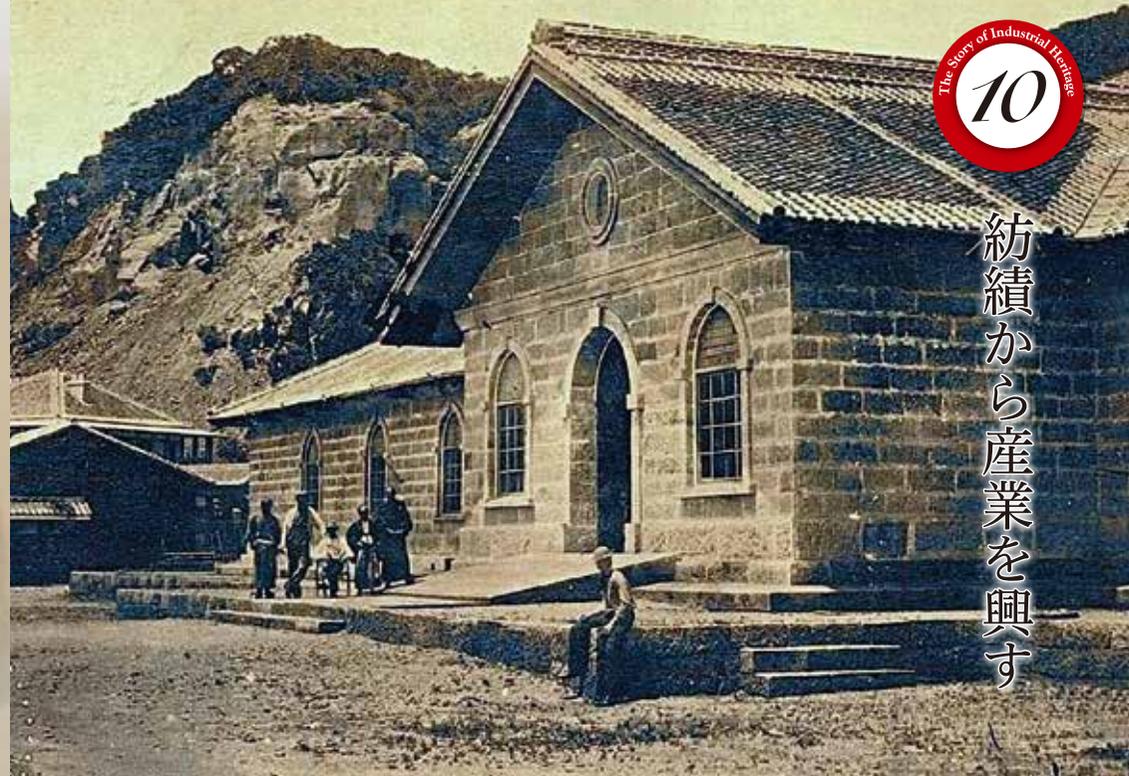
63P



83 蘭館山

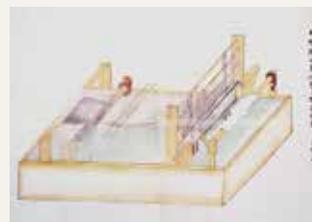
63P

19 Stories
95 Heritages
ストーリーに関する産業遺産はWEBでもご確認いただけます



紡績から産業を興す

『THE FAR EAST』九州大学附属図書館所蔵



『薩州鹿児島見取図』武雄銅島家資料 武雄市蔵

島津斉彬は紡績業の振興に力を注ぎ、水車で機械を動かして綿布の増産に取り組みました。1863年の薩英戦争後、薩藩はイギリスの科学技術を取り入れて近代化を進めます。さらに、五代友厚らにイギリスの紡績機械を購入させ、技術者の派遣を依頼するなど海外の技術を積極的に取り入れました。そして1867年、日本初の洋式機械紡績工場である鹿児島紡績所を建設。そこで育成された薩摩藩の技術者によって富岡製糸場をはじめ、全国の紡績工場に技術が広がり、日本の紡績事業を形作りました。



85 旧鹿児島紡績所技師館(異人館)

43P



86 紡績機

44P



82 田上水車館跡

42P



83 永吉水車館跡

42P

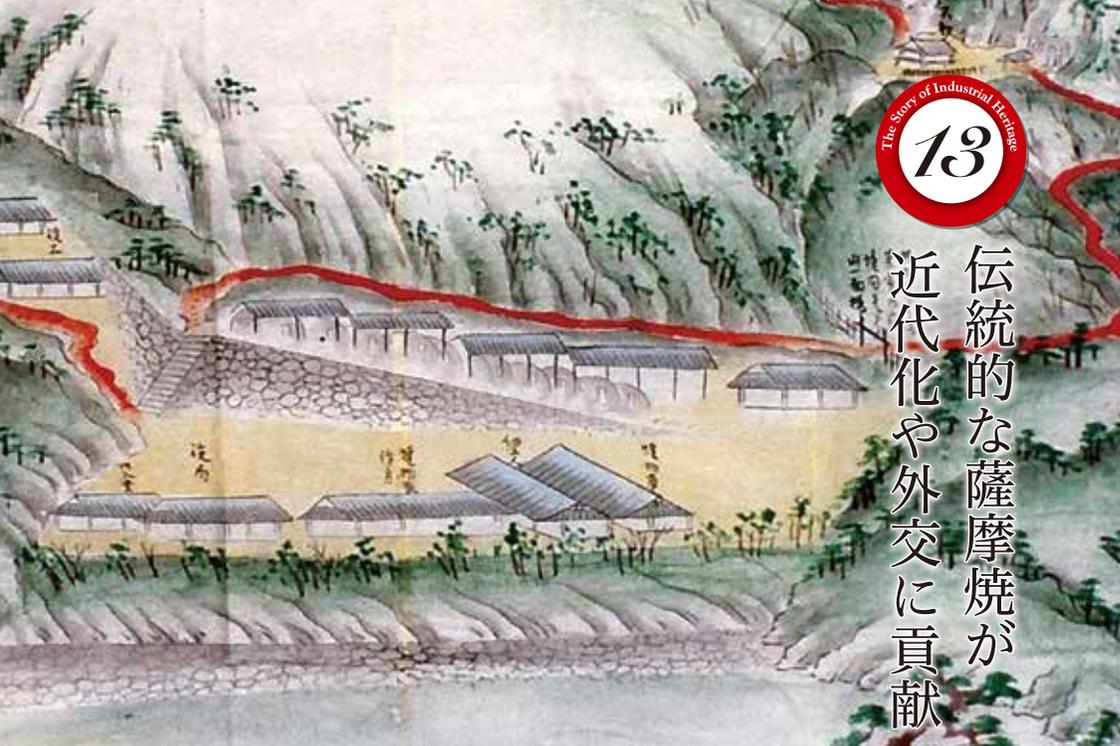


84 鹿児島紡績所跡

43P

19 Stories
95 Heritages
ストーリーに関する産業遺産はWEBでもご確認いただけます





The Story of Industrial Heritage
13

伝統的な薩摩焼が
近代化や外交に貢献

『薩州鹿兒島見取絵図』武雄鍋島家資料 武雄市蔵



The Story of Industrial Heritage
12

鉾山は薩摩藩の
重要な資金源

『胡麻目坑』尚古集成館蔵



『錦手牡丹文花瓶』
鹿兒島県歴史・美術センター黎明館蔵

島津斉彬は、高炉、反射炉建設に必要な1300度程度の高温に耐えるレンガを開発するため、薩摩焼の陶工らに耐火煉瓦の製造を命じました。また薩摩焼の輸出により藩を豊かにするため、従来の薩摩焼を金で多用した艶やかな焼き物に改良。1867年のパリ万博では、12代沈壽官や朴正官らが出品した薩摩焼が高い評価を受けました。その後、フランスではジャポニズム旋風が起き、薩摩焼はわが国の主要な輸出品になり、ヨーロッパ諸国で薩摩藩の存在感が高まり、薩摩焼の伝統技術が藩の近代化や外交に大きく貢献したといわれています。薩摩焼は現在でも欧米で「SATSUMA」の名で知られています。

江戸時代、鉾山事業は薩摩藩にとって重要な資金源のひとつで、幕末には藩収益の二番目の比率を占めるほどでした。特に錫山、山ヶ野、鹿籠は薩摩の三山と呼ばれ、藩が経営を管理しました。島津斉彬は集成館事業の電信実験を応用し、火薬を電気爆発させる採掘法を行うなど、ヨーロッパの技術を導入しました。明治時代には、当主の島津忠義がフランス人技師を招き、ヨーロッパの技術や蒸気機関を山ヶ野金山に導入するとともに、採掘した金や資材を輸送する道路や橋を整備。1907年、鉾山の設備は蒸気機関から電力に切り替えられ、山ヶ野(永野)金山の採金量は大幅に増加します。

-  **60** 南京皿山窯跡 **55P**
-  **61** 薩摩焼絵付図面 **55P**
-  **63** 御定式窯跡 **56P**

-  **25** 反射炉跡 **39P**
-  **26** 高炉跡 **39P**
-  **27** 礮窯跡 **40P**

-  **58** 鉄橋跡(永野金山) **64P**
-  **86** 観音滝発電所跡 **65P**

-  **58** 水天淵発電所 **54P**
-  **59** 大田発電所 **54P**
-  **70** 金山橋 **58P**
-  **84** 永野金山 **64P**

-  **13** 錫山 **34P**
-  **14** 錫山関連資料 **34P**
-  **56** 山ヶ野金山 **53P**
-  **57** 山ヶ野金山関連資料 **53P**





『鶴灯籠』尚古集成館提供

The Story of Industrial Heritage
15

薩摩藩・最先端の インフラ実験に成功

薩摩藩では電気通信の実験を行い、その成果を山ヶ野金山や永野金山の採掘のための地雷や、薩英戦争の際に設置された水雷に応用しました。また、島津斉彬はヨーロッパの町のように城下にガス灯の設置を計画。1857年には、仙巖園内の鶴灯籠でガス灯の点火実験に成功しました。明治維新後、明治政府参与となった松木弘安(寺島宗則)は、集成館での経験を活かして横浜・東京間に電気通信施設を開設。長崎・上海間では海底ケーブルの設置にも取り組みます。そして、人々から「日本電気通信の父」と呼ばれました。



『電線』尚古集成館蔵



85 鉄橋跡 (永野金山)
64P



56 山ヶ野金山
53P



3 電信使用の地碑
29P



57 山ヶ野金山 関連資料
53P



4 鶴灯籠
29P



76 松木弘安 (寺島宗則) 旧家
61P



15 錫山
34P



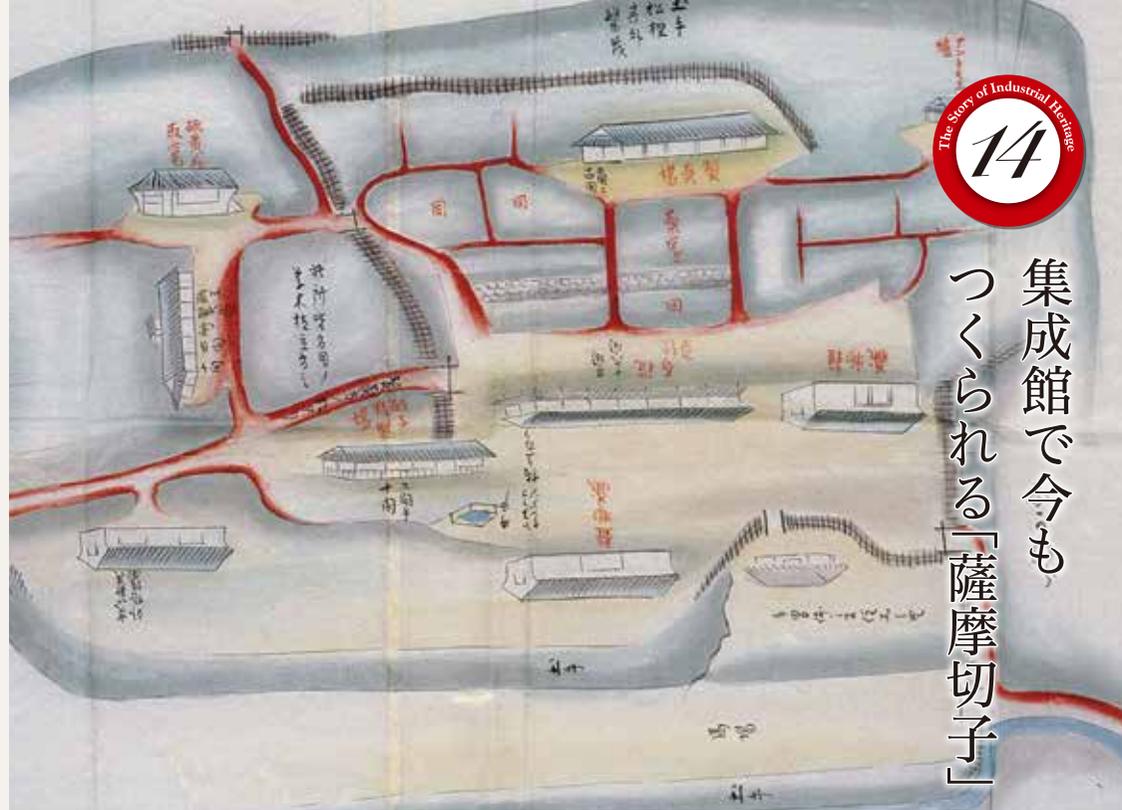
84 永野金山
64P



14 錫山関連資料
34P

19 Stories
95 Heritages

ストーリーに関する産業遺産はWEBでもご確認いただけます



集成館で今も つくられる「薩摩切子」

The Story of Industrial Heritage
14

『薩州鹿児島見取絵図』武雄鶴島家資料 武雄市蔵

薩摩藩でのガラス製造は、島津斉興が中村製薬館で薬瓶を製造させたことから始まります。島津斉彬はガラス製品を工芸品として海外に輸出することを目指してガラス産業の育成に取り組み、「薩摩切子」を完成させました。1855年に集成館の一角にガラス工場が建設され、薩摩藩のガラス技術と設備は国内最高水準に達しますが、工場は1877年頃に廃止されたと考えられます。その後1985年に復活。現在、集成館事業の伝統を受け継ぐ唯一の産業として創業された地で「薩摩切子」は生産され、鹿児島を代表する工芸品となっています。



19 Stories
95 Heritages

ストーリーに関する産業遺産はWEBでもご確認いただけます



12 製煉所(開物館)跡
33P



9 集成館ガラス工場跡
32P



8 中村製薬館跡 (紅ガラス製造所跡)
31P



西洋技術の研究と 人材育成



農業が人々の暮らしを 豊かに導く



集成館事業がスタートした時は、鎖国で外国人技師を招聘することができず、近代化事業はヨーロッパの書物だけで自力で進めなければなりません。島津斉彬は近代化に向け、寺島宗則や石河確太郎(奈良県出身)ら、藩内外の蘭学者たちを活用するとともに、近代化事業を担う人材の教育にも力を入れました。また、ヨーロッパの技術を学ばせるために、藩士に江戸、大阪、長崎への留学を勧め、特に長崎海軍伝習所には、航海術を学ぶために多くの留学生を派遣。その中から大阪商工会議所の初代会頭・五代友厚など、後の日本の近代化を支えた多くの人材が育ちました。

薩摩藩の領地はシラス台地が広がっていたため、他の藩に比べて米の収穫量が上がりませんでした。そのため、藩は温暖な気候を利用してサトウキビやレイシなどの薬用植物の栽培を行い、財政を補っていました。島津斉彬は、農業は国の基本という考えをもち、肥料や農耕具を改良しました。さらに、農作物の増産に取り組むとともに、白砂糖の製造、研究やオリブ栽培など新たな商品となり得る作物の開発を行います。また、水不足に悩む指宿では、井戸や農業水路を建設。耕地の拡大と農民の生活の向上にも熱心に取り組みしました。



砲術館跡



鳥越堀切

19 Stories
95 Heritages

ストーリーに関する産業遺産はWEBでもご確認いただけます



19 砲術館跡

36P



76 松木弘安(寺島宗則)旧家

61P



77 留学生渡欧の地

61P



10 開成所跡

32P



11 造士館跡

33P



12 製煉所(開物館)跡

33P

19 Stories
95 Heritages

ストーリーに関する産業遺産はWEBでもご確認いただけます



52 鳥越堀切

51P



72 坊津白糖製造工場跡

60P



87 佐多旧薬園

65P



31 吉野薬園跡

42P



50 山川薬園跡

50P



51 掘井碑

51P



『薩摩藩英国留学生』鹿児島県立図書館蔵



英国留学生派遣と機械紡績

薩英戦争の後、薩摩藩はヨーロッパ、特にイギリスの科学技術を導入して近代化を進めていく必要性を感じていました。1865年、科学や軍事に関する人材育成の洋学校、開成所の学生ら総勢19名の使節・留学生（使節3名・通訳1名・留学生15名）をいちき串木野市の羽島の港からイギリスへと密航させます。使節の新納久脩、五代友厚はマンチェスターのプラット・ブラザーズ社に紡績機械の購入や技師派遣を依頼し、日本初の洋式機械紡績工場である鹿児島紡績所の操業を実現。松木弘安（寺島宗則）や五代友厚に加え、当時の留学生は、その後海外での経験を活かして明治政府の外交官や政治家、実業家として活躍しました。



『1872年の鐵地区』尚古集成館蔵



36 紡績機

44P



76 松木弘安（寺島宗則）旧家

61P



77 留学生渡欧の地

61P



10 開成所跡

32P



34 鹿児島紡績所跡

43P



35 旧鹿児島紡績所技師館（異人館）

43P



琉球王国を介した外交で財政を強化

薩摩藩にとって琉球王国を介した外交、交易は非常に重要なものでした。藩の外交や防衛政策は琉球王国からもたらされる外国の情報などを参考に決定され、琉球口貿易による利益が藩財政や集成館事業の主要な資金源のひとつになっていました。藩では琉球王国との貿易の拠点として、城下に琉球館を建設するなど丁寧な受入を行いました。また、瀨崎太平次などの海商は、物資の海上輸送や多額の資金援助を通じて集成館事業を支えました。



第8代 瀨崎太平次銅像



48 指宿呂捍海隄記

49P



19 Stories
95 Heritages

ストーリーに関する産業遺産はWEBでもご確認いただけます



45 第8代瀨崎太平次の墓

48P



46 濁口の船溜り

49P



47 宮ヶ浜港防波堤

49P



1 仙巖園

28P



2 琉球館跡

29P



44 河野覚兵衛屋敷跡

48P

19 Stories
95 Heritages

ストーリーに関する産業遺産はWEBでもご確認いただけます

